

本棚古典の歩道



『くるみわり人形』E.T.A.ホフマン原作
モーリス・センダック絵
渡辺茂男訳（ほるぶ出版 1985年）



『くるみわり人形』E.T.A.ホフマン原作
ロベルト・インノ・チェンティ絵
金原瑞人訳（西村書店 1998年）

『くるみわり人形とねずみの王様』

E.T.A.ホフマン原作

評者

皆川美恵子
(大学教員)

児童文学の分野で、古い時代に作られ、現代に至るまで影響力を持ち続けている古典作品がある。『くるみわり人形とねずみの王様』は、ベルリンで一八一六年に発表されている。日本では江戸時代の文化十四年ごろであり、滝沢馬琴が活躍していた時代である。作者のホフマン（一七七六—一八二三）は、法律家でありながら、作曲家、画家、作家と多能多才な人であった。本人はモーツアルトにあこがれて音楽に最も情熱を注ぎ、オペラでの成功を目指したとされる。まさか、友人の子どもたちに即興で話した物語が、長く子どもの本棚に並んで愛されていようなど想像すらできなかつたことだろう。

この作品は、クリスマスに不思議なことが起こるクリスマス・ファンタジーであり、人間の家の床下に住んで、別の世界を生きるねずみの話でもあり、そして何よりも、人形が生命を持つて動きだす人形ファンタジーなのである。この作品以降に創作された人形が活躍する児童文学に、多大な影響を与え続け、近年ではディズニーのピクサー作品『トイ・ストーリー』にまで及んでいる。

皆川美恵子（みなかわみえこ）

十文字学園女子大学教授。専門分野は児童文学・児童文化。近年は、ひな人形の研究にいそしんでいる。

今まで日本に翻訳紹介された作品、絵本化されて紹介された作品は数多くある。ここでは、センダックによる絵本『くるみわり人形』（ラルフ・マンハイム英語訳／渡辺茂男邦訳 ほるぶ出版一九八五年）、ならびにインノチエンティの華麗で細密な絵が付された『くるみわり人形』（金原瑞人訳 西村書店一九九八年）によつて、話を進めていくつてみたい。なお、前者の絵本の訳のはうがドイツ語版の原作に近い邦訳であり、後者は、子どもの読者を配慮して、読みやすさから詳細は略しているようである。

宿命の対決の由来

あらすじは、次のようなものである。

主人公は、マリーで七歳。姉ルイーゼと兄フリツツがいるが、二つの絵本の絵では、とともにフリツツは弟のように幼く小さく描かれている。十二月二十四日、子どもたちがクリスマス・プレゼントをもらう場面から始まる。この家には、二人の子どもの名付け親である容貌怪異な、作者ホフマンを彷彿とさせる人物が出入りしている。ドロッセルマイヤーという

その人は、判事が手先が器用で、精巧な仕掛けの玩具を作りしては子どもたちへプレゼントしている。クリスマス・イヴのこの日、オート・マータ（自動機械人形）が組み合わされた城をプレゼントした。マリーは、プレゼントのドレス、絵本、人形、生姜パンのお菓子人形などよりも、くるみわり人形に魅了される。小男で不格好、頭が大きく胴長で短足の人形だが、着ている洋服の趣味が良いと思う。顔つきも人が良さそうで、生まれも育ちも教養も兼ね備えていると思う。インノチエンティの絵では、マリーがくるみわり人形をうつとりと抱きかかえていた姿がとらえられている。

この物語は、なぜ、くるみわり人形がぶざまで醜い姿なのかということが解き明かされていくストーリーである。おそらく、この時代にドイツに広く登場し始めた、くるみを割る実用的な人形だったと思われる。ホフマンは、くるみを歯で割るため頭部が異常に大きく、歯を剥き出しにした醜い人形を題材にして、「美女と野獣」の昔話をモチーフにしたファンタジーをつくり出したのである。醜い姿に変身し

ているくるみわり人形に愛情を捧げる娘によつて、くるみわり人形は元の人間の姿に戻ることが可能となつたという話なのである。

さて、醜い姿に変えられた呪いとは何だろうか。悪い魔法使い、悪い妖精の役割を、宮殿のかまどの下、ねずみ世界に君臨しているネズミリンクス夫人が担つている。昔、城に王様とお妃様が住んでいたが、王様の大好物のソーセージをネズミリンクス夫人が横取りしてしまい、王様の逆鱗に触れて、ねずみ退治が決行された。家族を殺されたネズミリンクス夫人は、恨みを抱き、王様に誕生した姫に呪いをかける。本来はかわいいピルリパット姫に呪文をかけ、世にも醜くしてしまつたのである。ピルリパット姫が醜く変身する場面は、センドッグの絵がとらえている。『まどのそとの そのまたむこう』の絵本で描かれた、取り換えたゴブリンの赤ん坊が、再びここに登場している。

ところで、ねずみ退治は、宫廷の時計職人（ドロツセルマイヤーという名前）が考えたねずみ取り機によつて成功した。王様は、今度は姫を元のように

美しくするようにと命ずる。こうして呪いを解くための解決が図られていく。

それは、「世にも堅いくるみ」を「生まれてからひげをそつたことのない、そして一度も長靴をはいたことのない若者」が、姫様の目の前で、自分の歯で割つてみせ、目をつぶつたまま中の中を姫様に手渡し、そのままつまづくことなく七歩下がるということなのである。無事、お姫様はくるみを食べて、美しさを取り戻すことができた。しかし、ここで事件が起きてしまう。退く時に、若者は、ネズミリンクス夫人を踏みつけて殺してしまうのである。死に際に、ネズミリンクス夫人は、若者を醜い姿のくるみわり人形に変えてしまう。そして、今に自分の息子あだが仇を討ち、死に至らしめることを予言する。

くるみわり人形とねずみの王様の宿命の対決は、このような因縁によつている。若者にかけられた呪いを解くには、ネズミリンクス夫人の息子で、七つの頭を持つたねずみを殺さなくてはならない。さらに、若い女の人が、醜い姿のままの若者を好きにならなくてはならないのである。

動きだす人形

マリーの家には、人形やおもちゃを飾る、ガラスがはめ込まれた立派な戸棚がある。

くるみわり人形は、フリツツが乱暴に扱つたため、歯が欠けてしまい、あごや口も傷ついてしまう。マリーは白いリボンで包帯のように巻き、人形用のベッドに寝かせてから、自分の部屋に寝に行こうとした。その時、不思議な出来事が起こる。ねずみが床下から壁から噴き出してきて、七つ頭の巨大なねずみの指揮の下、ねずみの軍隊が、くるみわり人形に闘いを挑んできたのである。インノチエンティの描く戦闘場面は、精密であるだけに恐ろしく、迫力満点である。七つ頭にそれぞれ王冠をかぶつたねずみを見た時、マリーは恐怖から気を失いそうになり、ひじが戸棚のガラスに当たり、けがをする。

こうして人形ファンタジーが始まつていく。くるみわり人形が話しだし、フリツツの兵隊人形たちを

鼓舞し、おもちゃ戸棚の中のすべての人形たち（チロル人形、ツングース人、中国皇帝、床屋、庭師、

キューピー、ライオン、虎、猿など）総力戦での戦闘の火ぶたが切つて落とされる。やがて、くるみわり人形が敵に囲まれ絶体絶命のピンチに立つた時、マリーは「ああ、私のお人形さんが！」とすすり泣きながら、左足の靴を脱いでねずみの王様に投げつける。その途端、すべてが消えてマリーは床に倒れる。

病気見舞いにやつて来たドロッセルマイヤーのおじさんは、歯が折れたくなるみわり人形を、持ち前の器用さで修理してくれていた。実はその時に、くるみわり人形が、なぜ醜い姿になつたのか、先に紹介したねずみとの宿命の対決の話を、病床のマリーに語るのである。やがて、マリーの病気がすっかり治ると、ドロッセルマイヤーはマリーに優しく話しかける場面が、インノチエンティの絵で表されている。作者ホフマンは、実の娘を亡くしている。友人の子どもマリーを特にかわいがり、このマリーに語った話が、本作となつたのであつた。

おもちゃ戸棚の世界

何とも恐ろしい七つ頭のねずみに襲撃されるのは、

おもちゃ戸棚の世界である。四段からなる棚には、それぞれ次のようなおもちゃが収められている。

最上段は、からくり機械によつて精巧に作られた仕掛けによる人形が並んでいる。今日、オート・マータと呼ばれている人形は、時計職人によつて作られ、オルゴールとも組み合わされている。鳩時計やかつこう時計は今でも残っているが、ドイツは、精密な機械を扱う時計職人を輩出している。後に職人たちはスイスに移つていくが、この時代、さまざまなおート・マータが考案されていることが、物語からもうかがうことができる。メトロノームの製作者としても名高いメルツエルは、チエスをするトルコ人の自動機械人形を興行に用いた人物として有名だが、ホフマンと同時代人である。

二段目の棚は、絵本である。すでに、グリム兄弟による『子どもと家庭のための童話集』が一八一二年に出版されている。本作の出版よりも一年前のことである。当時の絵本とは、どのようなものであつたか、ホフマンは次のように書いている。「絵本は色とりどりの絵で、二人をべつの世界にいざなう。絵本には、あざやかな花や、世界のいろんな人々や、さまざまな遊びをしている子どもたちが描かれていて、まるで生きていて、はなしかけてきそうだ。」このころ、すでに絵本の出版も盛んになつていて、これを知ることができる。

三段目の棚のおもちゃの兵隊は、男の子のおもちゃとして人気があり、フリツツはさまざまな兵隊人形を持つている。人形史からは、十七世紀末、まず紙張子の兵隊、次に木の兵隊、それから金属製の兵隊のおもちゃが登場する。ハノーバーの鋳物師が鉛を流し込んで制作し、家内労働者たちが色を塗つて完成させた。しかし、この時代は、木の兵隊人形で一も、きちんと歩いたり踊つたりするお城の人形に飽きている。

さて、それよりも、ホフマンが生きた時代のドイツ

ツは、皇帝ナポレオンが神聖ローマ帝国を消滅させて、周辺国へ勢力を拡大するため攻め込んでいった時代である。ロシア遠征に失敗して、一八一四年にナポレオンは退位するが、ホフマンの人生は、ヨーロッパの政治的混乱の中で翻弄ほんろうされている。フリツの兵隊人形は、戦争の時代を暗示しているよう。

四段目の棚の「人形の家」には、人形をはじめ、人形たちのさまざまな調度品が収められている。二ユールンベルグのおもちゃ職人による品々と思われる。また、ここに、マジパンの人形や砂糖菓子の人物が収められている描写も極めて興味深い。実は、本作品の最終には「人形の国」があり、それは「お菓子の国」なのである。呪いが解けた若者は、マジパン城の王様であり、マリーを妃として迎えるという結果なのだ。

マジパンとは、アーモンドと砂糖を混ぜ込んだ菓子の材料である。マジパンで造形する菓子人形は、人形職人の多かつたドイツで精巧なものが作られた。ではなぜ、お菓子の人形が誕生したのだろうか。これもナポレオンにかかわっている。ヨーロッパの

砂糖は、イギリスが植民地で栽培したサトウキビによる砂糖であつた。しかし、ナポレオンが大陸封鎖を行い、イギリスから砂糖が入らなくなると、ドイツの科学者マルクグラーフが寒地で栽培可能な甜菜てんさいから砂糖を取り出すことに成功し、ドイツは砂糖の大生産国となつたのだ。豊富な砂糖と、森の恵みの木の実を用いて、ドイツでは菓子産業が隆盛となつていた。

このように見てくると、おもちゃ戸棚の世界は、ドイツの社会状況を映してはいないうだろうか。となると、七つの王冠をかぶつたねずみの王様とは、ナポレオンとも考えられなくもない。「堅いくるみ」とは、困難な仕事を意味するという。そのくるみを割ることに立ち向かう物語なのである。マリーが、オレンジの小川が流れ、ボンボン、チョコレート、クッキーで飾られたお菓子人形の世界で、お姫様になるという結果は、冬の時代を過ごしている子どもたちへホフマンが贈つた、やがて来る「ドイツの春」への希望であつたろう。